

◆二八四

阿仏房御書

或文永九年三月十三日

五十一歳御

作 1304p

与阿仏房

御文委く披見いたし候

了んぬ、

抑 宝塔の御供養の物

御心

錢一貫文 白米 品 品 したじなをくり物たしかに うけとり候

んぬ、此の趣御本尊 法華経にも ねんごろに申し上げ候 御心

やすくおぼしめし候へ。

一御文に云く多宝如来 涌現の宝塔 何事を表し給うやと云

云、此の法門ゆゆしき大事なり宝塔を ことわるに天台大師文句

の八に釈し給いし時 証前起後の二重の宝塔あり、証前は

迹門 起後は本門なり或は又閉塔は迹門 開塔は本門 是れ

すなわ ぎょうち

即ち境智の二法なりしげきゆへに、これををく、所詮 三周の

しょうもん

ほけきよう

こしん

ほうとう

い

ほけきよう

たま

なんによ

声聞

法華経に来て己心の宝塔を見ると云う事なり、今日蓮が

でしだんな

まつほう

ほけきよう

たも

なんによ

弟子檀那又又かくのごとし、末法に入つて法華経を持つ男女の

ほか

ほうとう

まつほう

も

しか

きせんじようげ

すがたより外には宝塔なきなり、若し然れば貴賤上下をえら

な びみょうほうれんげきよう

ほうとう

も

しか

きせんじようげ

ばず南無妙法蓮華経と となうるものは我が身宝塔にして我が

たほうによらい

みようほうれんげきよう

ほか

ほうとう

ほうとう

身又多宝如来なり、妙法蓮華経より外に宝塔なきなり、法華経

だいもく

ほうとう

ほうとう

な びみょうほうれんげきよう

ほか

ほうとう

ほけきよう

の題目 宝塔なり宝塔又南無妙法蓮華経なり。

ほうとう

ほうとう

ちすいかふうくう

ほうとう

ほうとう

だいもく

今阿仏上人の一身は地水火風空の五大なり、此の五大は題目

ごじ

しか

あぶつほう

ほうとう

ほうとう

ほうとう

あぶつほう

の五字なり、然れば阿仏房さながら宝塔 宝塔さながら阿仏房

ほか

さいかくむやく

もん

しん

かい

じよう

しん

此れより外の才覚無益なり、聞 信 戒 定 進 捨 慚

しっほう

ほうとう

もん

しん

かい

じよう

しん

の七宝を以てかざりたる宝塔なり、多宝如来の宝塔を供養し

ほうとう

ほうとう

たほうによらい

ほうとう

ほうとう

くよう

たま

給うかとおもへばさにては候はず我が身を供養し給う我が身又

さんじんそくいっ

ほんがく

によらい

三身即一の本覚の如来なり、かく信じ給いて南無妙法蓮華經

とな

たま

ほうとう

じゆうしよ

なむみようほうれんげきよう

ほけきよう

と唱え給へ、ここさながら宝塔の住処なり、経に云く「法華經

ところ

ほうとうそ

ゆげん

を説くこと有らん処は我が此の宝塔其の前に涌現す」とはこれ

ほうとう

なり、あまりにありがたく候へば宝塔をかきあらはし まいら

しんじんこうじよう

あら

せ候ぞ、子にあらざんば ゆづる事なかれ信心強盛の者に非ず

しゆつせ

ほんかい

んば見する事なかれ、出世の本懐とはこれなり。

あぶつほう

しゆつせ

ほんかい

もう

じようぎようほさつ

阿仏房しかしながら北国の導師とも申しつべし、浄行菩薩

生

たま

にちれん

たま

ふしぎ

うまれかわり給いてや日蓮を御とふらい給うか不思議なり

ふしぎ

おんこうろざし

にちれん

じようぎようほさつ

しゆつげん

不思議なり、此の御志をば日蓮はしらず上行菩薩の御出現

任

の力にまかせたてまつり候ぞ、別の故はあるべからず あるべか

べち

らず、ほうとう宝塔をば夫婦ひそかにをがませ給へ、たま委くわしくは又又申すべ
く候、きようきようきんげん恐恐 謹言。

ぶんえい文永九年壬申 みずのえさる三月十三日

にちれん日蓮 かおう花押

あぶつほうしようにんもと阿仏房 上人所へ